

心はいつも  
旅する

## ユーラシアンホットライン

1998.9.22  
VOL-9

## &lt;秋を迎えクラブ始動&gt;

「ユーラシアンフォーラム」  
開催

9月6日午後3時から、練馬区役所20階交流会場で「ユーラシアンフォーラム」を開催しました。今月帰国するキルギスタンのチムールベクさん、タジキスタンのフルシェダさんがそれぞれ、1年の留学経験に基づく日本と日本人についての考え方（別掲）や未知の国タジキスタンの地理と社会文化、現状などについて（会報掲載）語りました。7日帰国するサハ共和国のアンドレイさん、ナターリヤさんもクラブを通して経験したホームステイの思い出やクラブ会員との交流を懐かしく語り、出席した20数人とお別れの言葉を交わしていました。クラブのあり方や活動計画についても話し合われました。フォーラムの後半はお別れパーティに切り替え、キルギス親睦旅行に参加したメンバーが購入した蜂蜜や手製のケーキ、食事が用意され楽しいひとときをすごしました。

## 秋のプログラム決定

秋本番を迎え、クラブの活動も本格化します。

文化講座（別記）のほか以下のように、奥只見山小屋合宿、ユーラシアンフォーラムその他の日程で活動します。

## ▼山小屋ミーティング（温泉と紅葉見学）

：日時 10月10日、11日

：場所：奥只見銀山平大沢加工山荘

ホームページ、来年以降の芸能祭、ウズベク文化村について

## ▼ユーラシアンフォーラム

：留学生、大使館関係者、企業人、民族文化交流関係者その他のショートスピーチで懇談

10月3日午後2時半から、国立オリンピック記念青少年センターでスピーカー/

在日サハ共和国研修生 アナスタートヴァ オリガさん

「ロシアの中のサハ」（仮題）

東京アイヌ協会 浦川治造会長

「アイヌ今そして昔」（仮題）

11月8日午後2時半から、練馬区役所19階中会議室でスピーカー/

法政大学大学院モンゴル留学生 M. ビレグさん

「ストリートチルドレン支援基金について」

ウズベキスタン留学生 ウスマノフ ファルーフ氏他

「留学生と中央アジアの未来」

12月19日午後2時から、池袋・東京芸術劇場小会議室

## ▼恒例のカニ料理で総会兼忘年会

12月19日午後6時半から、池袋・東京芸術劇場大会議

## ▼年末年始/沿海州、アムール、サハリンの少数民族村訪問

## ▼ホームページ会合/10月7日午後6時半から、場所未定

ユーラシア情報通信ネットワークについて

## ▼アイヌ文化フォーラム/日時未定/アイヌ民族誌映像を見る会、山梨県ポロチセでアイヌ料理とアイヌ文化の理解促進

<モンゴルの子供に教育と生活改善の支援を呼びかけ「モンゴル子供発展センター」>  
テレビや新聞紙上で「ストリートチルドレン」として報道されている子供たちに生活や教育の援助の手を差し伸べようと、モンゴル女性や在日の留学生、支援者の協力で「モンゴル子供発展センター」が設置された。基本的な考えは「一日1ドルで、一人の子供の未来を帰る」との考えで、子供のスポンサーを見つけようというもので資金援助を募集しています。〒189-0012 東京都東村山市萩山町 5-6-20-503 M. ビレグ TEL0423-92-8800

## ▼文化講座プログラム

10月 [ユーラシアの古代文字]

17日（土）ユーラシア古代文字の系譜

森安 孝夫・大阪大学教授

23日（金）モンゴル高原の古代トルコ語碑文調査

片山 章雄・東海大学助教授

30日（金）ユーラシア古代”記号文字”の謎

宇田川 洋・東京大学教授

## 11月〔歴史を作った人々〕

13日(金) 李陵と司馬遷

林 俊雄・創価大学教授

20日(金) ユーラシアの交易とソグド人

吉田 豊・神戸市外大助教授

27日(金) マルコポーロの謎

杉山 正明・京都大学教授

## 12月〔フィールドレポート〕

4日(金) ダルベルジンテペの発掘調査 堀暁・古代オリエン特博物館研究部長

11日(金) 内蒙古大岱地区遺跡群調査について 大貫 静夫・東京大学助教授

18日(金) 寧夏回族自治区原州遺跡群の調査 谷一 尚・共立女子大学教授

▼土曜は午後2時から、金曜は午後6時半から、池袋、東京芸術劇場中会議室

▼インターカレッジ文化講座(秋季)申し込み受付中!料金:月別5千円、各回2千円

## 秋季講座の概要

## ①10月17日(土)「ユーラシア古代文字の系譜」

森安 孝夫先生・大阪大学教授

【10月のテーマ:ユーラシアの古代文字】

かつての四大農耕文明圏ではいずれも固有の文字を創出したが、現在世界中で用いられている文字の系譜は、その内の2つだけといっても過言ではない。即ちアルファベットと漢字である。漢字の本場の中国でさえピンインというローマ字システムを使う今となっては、極端な話、日本以外の全世界はアルファベットに征服されたと言えよう。国際化のために日本もローマ字化せよとの議論は、私は与しないが、時代の趨勢ではある。

それはともかく、ユーラシア中央の西アジアに生まれたアルファベットが、西方のギリシア・ローマ・ロシア文字へと発展し、大西洋を越えたのに対し、東方ではアラム・ソグド・ウイグル・モンゴル・満州文字という系譜により、遂に太平洋にまで到達した。さらには起源を同じくするが別の系統として、西アジアのアラビア・ペルシア文字、インド～中央アジアのカロシュティー・ブラーフミー・チベット文字があり、さらには突厥文字(ルーン文字)やバスマ文字やハングルまで生み出すに至った。一方、漢字からはカタカナ・ひらがなの外、契丹・西夏・女真文字が作られた。これら全体を概観するとともに、遊牧騎馬民族が活躍し、シルクロード貿易の舞台となった中央アジアから出土した6～14世紀の

文書・碑文に使われる文字についてやや詳しく紹介したい。

参考文献:森安孝夫『ウイグル=マニ教史の研究』(6000円);『内陸アジア言語の研究』

12号、(2500円)。いずれも京都、朋友書店(TEL.075-761-1285;FAX.075-761-8150)取扱。

## ②10月23日(金)「モンゴル高原の古代トルコ語碑文調査」

片山 章雄先生・東海大学助教授

モンゴル高原で突厥(6～8世紀)やウイグル(8～9世紀)の古代トルコ語碑文が複数発見され、調査解説が始まったのは19世紀末のことだった。既知の有名な碑文は後に発見された諸碑文とも対照研究され、いまさら新知見は出ないとも思われた。しかし1996～97年のモンゴルとの共同調査で、突厥のキョル・テギン碑文やオングイ碑文、ウイグルのカラ・バルガスン碑文に関し、断片接合や拓本の信憑性など新発見があった。これらを軸に報告したい。

参考書物:

D・マイダ、加藤九祚訳『草原の国モンゴル』(新潮選書)、新潮社、1988年  
小長谷有紀編『アジア読本 モンゴル』河出書房新社、1997年

『モンゴル展(図録)』国立民族学博物館、1998年(夏に開催・刊行予定)

## ③10月30日(金)「ユーラシア古代“記号文字”の謎」

宇田川 洋先生・東京大学教授

ユーラシア東部地域にも古代文字が発見されている。中国では甲骨文字があり、シベリアには突厥文字(碑文)がある。わが国では初期ヘブライ文字の存在を説明する人もいる。ところで北海道でも、著名な余市町フゴッベ洞窟や小樽市手宮洞窟において文字に類するものが確認されている。1997年にはそれらをめぐって「手宮洞窟シンポジウム」が開催されたが、それらの成果を紹介しながら、“記号文字”の謎を追ってみたいと考える。

【11月のテーマ:歴史を作った人々】

## ④11月13日(金)「司馬遷と李陵」

林 俊雄先生・創価大学教授

ユーラシア草原に独自の文化を作り上げた騎馬遊牧民たち、しかし7世紀以前、彼らは文字を持たなかったため、その古代の歴史記録は隣接する定住農耕文明の著作の中にしか残されていない。その多くが自分の価値観で彼等を「蛮族」視する中で、草原地帯の自然環境上の特性を理解し、遊牧民の存在を相対化して客観的に眺めることのできる具眼の士もいた。その代表が西ではヘロドトス、東では司馬遷である。匈奴国家の中では、多数の定住地帯出身者が、それぞれの役割を果たし大きな貢献をしていた。その一人、史書・文学作品では「悲運の將軍」として描かれる李陵を通し、司馬遷及びその歴史観やユーラシア草原の時代背景を探る。

## ⑤11月20日(金)「ユーラシアの交易とソグド人」

吉田 豊先生・神戸市外国語大学助教授

中央アジアがイスラム化する以前の時代、シルクロードを行き来する商業民族として活躍したのがソグド人でした。彼らはアムダリアとシルダリアに挟まれた地域に住むイラン系の民族でしたが、現在は存在していません。この講座では、ソグド人の歴史や文化について概説し、それらの中で特にシルクロードを通じて起こった異文化との接触によって成立したと考えられる事物や、東西の文化交流にソグド人が果たした役割について触れる予定です。

③11月27日(金)「マルコ・ポーロの謎」

杉山 正明先生・京都大学教授

マルコ・ポーロとその旅行記については、はじめからある前提が人々の頭を占めてきました。それは、ともかくマルコ・ポーロという人物が歴史上確かな一人の人間として存在し、モンゴル時代のユーラシアを東西に大旅行したということ、もうひとつは俗に『東方見聞録』と呼ばれるその旅行記は、はじめからちゃんとした書物として記され、西政各地に伝わる写本は、あくまでその「原本」からの写しか節略本であると

いうことの二点。しかし、モンゴル時代の原典史料を扱っているものには、ともに大いに疑問です。マルコ・ポーロにまつわる根本からの疑問をお話させていただきます。

【12月のテーマ：フィールドレポート】

①12月4日(金)「ダルベルジン・テベ(ウズベキスタン)の発掘調査」

堀 眺先生・古代オリエント博物館研究部長  
古代オリエント博物館では1996年以来、ウズベキスタンの南部、アフガニスタンとの国境の近くにあるダルベルジン・テベの発掘調査を行っている。この遺跡はグレコバクトリア時代に建設が始まり、クシャーン朝からクシャノ・ササン朝時代にはこの地域の中心的な都城に成長し、漆喰で造られた菩薩や仏陀尊像で荘厳された大規模な仏教寺院も建設されている。私たちはチタデル(城砦)の上層と墓地进行してあり、それらの成果について紹介する。

②12月11日(金)「内蒙古自治区岱海地区遺跡群の調査」

大貫 静夫先生・東京大学助教授  
岱海は内蒙古自治区の区都フフホトの東約100kmに位置する湖である。明代の長

城は岱海のすぐそばを通っているように、この地域は古来、遊牧民と農耕民の交錯した地域であり、新石器時代にはこの地域は農耕民の世界であり、それがその後遊牧民の世界に変わって行く。その農耕民と遊牧民がこの地域にどのようにして出現し、また交替したのかを日中共同で1995~1997年の3年間調査してきた成果をもとに紹介する。

③12月18日(金)「寧夏回族自治区原州遺跡群の調査」

谷一 尚先生・共立女子大学教授

95~96年、文部省科学研究費を得て日中合同の原州聯合考古隊を組織し、中国寧夏固原の原州遺跡で95年に唐・史道洛墓(658年葬)を、96年に北周・田弘墓(575年葬)を発掘した。史道洛墓では、墓誌、金銀極彩色の鎮墓獸・俑、東ローマ金貨、六曲ガラス杯などが、田弘墓では、墓誌、朱・白・黒の彩色人物壁画、玉器、5点の東ローマ金貨など貴重な遺物が多数出土した。本講ではこれらの出土品を中心に、シルクロードを通じての古代の文化交流の諸相について考察する。

### <<報告 I>>スマラク華やかに公演

ユーラシアンクラブの協力で、ウズベキスタン共和国のフェルガナ地方から招聘された歌舞芸能団「スマラク」は9月14日から20日まで1週間開催されたアジアマンス芸能フェスティバルで、印象深い歌舞を公開した。チムールが遠征の時に使用し、50キロ先にまで音が届いたという長さ3メートルのラッパ、カルナイの迫力ある音響、太鼓ドイラの力強い音色、カラフルな衣装に身を包んだ女性の軽やかな舞踊などリズム感溢れ、華やかでエネルギッシュな舞台からは日ごろの訓練の厳しさが随所に感じられ、野外ステージ周辺には約1千人の聴衆が集まり、総立ちで演目の終わる毎に大きな拍手を送っていました。

### <ユーラシアの芸能を紹介>

クラブは来年以降、ユーラシアの芸能の紹介を系統的に実施していきます。多くの地域で、地域



の主体性で「ユーラシア芸能祭」が開催されることが、クラブの目的であるユーラシア諸民族の理解、親睦、協力の促進に有意義であるとの考えから実施するもので、客観的評価の十分な団体から逐次情報を提供していくつもりです。会員の皆さんが、多くの関係者に働きかけていただくようお願いします。

## &lt;&lt;報告Ⅱ&gt;&gt;キルギスタンへクラブ親睦旅行

クラブは中央アジアキルギスタンへの親睦旅行を8月7日から15日にかけて実施しました。参加者は文化講座の会員福井さんと友人の若林さん、及び静岡の会員、杉山さん、望月さん、青森の会員、堀内さんの6人。また研究ため一時帰国のリシペクさんと名古屋の池田さんもビシュケクまで同行しました。カザフスタンアルマトイ空港には、現地でクラブの会員、カリジン・アクマタリエフ氏（映画監督、映画学校教授）及び昨年から今年にかけて留学生として日本に滞在し、クラブの催しを一緒に行ったトラットさん（大蔵省勤務）が出迎えてくれました。今回は行き違いでヌルジンさん、ジカさんとは会えませんでした。トラットさんが、ビシュケク郊外の国立自然公園の山小屋で大蔵省の同僚とともにプロフやシャシリクで歓待してくれたほか市内観光も買って出してくれたほか、ホームステイした新潟県小出町の上村冬さん宛てに民族人形を手渡すよう頼むなど、人情あふれるもてなしを示してくれました。リシペクさんは、ご両親にクラブを紹介する目的で自宅へ招待してくれました。この後日本語教育に熱心に取り組む第1寄宿舎学校を訪ね、校長と話し合うことができ文具を寄贈、日本語学習用にビデオ付テレビの寄贈も約束しました。一行はその後、キルギスの遺跡訪問や温泉などもルートに入ったイシククル湖一周のたびに向かいました。詳しい内容は参加者の報告としてホームページに掲載しています。

キルギス、透明感あふれる別天地縹緲—ラシアンブルーの空の下で  
福井伸彦

今回のキルギスツアーも終わりにさしかかった8月13日の午前中、私たちは前日のキャンプ地クズルスーから、再びイシククル湖東端の町、カラコルを目ざしていました。道の脇に広がる草原をふと見ると、沢山のミツバチの巣箱を積み込んだ、養蜂業者の何台ものトレーラーが目につきました。「ハチミツが買えるかもしれない」という大野さんの一言で、カリジンさんが大声でなにか叫びました。すると、容貌怪異の中年の人物が、上半身裸の巨体を揺すりながら、ゆっくりと我々の車に近づいてきました。養蜂一家の主人でした。私たちは、彼の案内で巣箱を積んだトレーラーの中に入ったりして、仕事ぶりを見せてもらいました。そして、巣箱の中から取り出した、蜜蝋や蜜が詰まった巣板1枚と、ペットボトルの上の部分のスパッと切り取った容器に入った、1杯の新鮮なハチミツを買うことができました。容器の中には何匹ものミツバチが、まるで透明な琥珀に封じ込められたように、沈んでいました。車に戻って、私たちは一匙ずつハチミツを嘗めてみました。香りも味も感じることなく、口の中には、ひたすら純粋な強い甘さが広がりました。このハチミツの、見た目にも、味わってみても非常に強烈な透明感が、強く印象に残りました。

そして、この「透明感」は、このキルギスの地を象徴しているように思えました。私は過去数年間、モンゴルから中央アジア一帯を、何度も旅してきました。その体験の中で共通していたのは水不足でした。「現地では絶対に生水は飲まない」というのが旅の鉄則でした。ところが、キルギスでは、天山山脈の大氷河から溶け出した水が、地下水となって山を下り、いたるところに湧き出しています。道端に水場を見つけたら、

車を止めて水筒に詰めれば、水の準備はそれでOK。ひんやりと冷たくて美味しい透明な湧き水が、乾燥した大気の中で知らぬ間に乾いた喉を、存分に潤してくれます。「水と情報はタダ」とよく言われるような環境で育った私たち日本人にとって、湧き水を心おきなく飲むことができるキルギスは、本当に心休まるころだと思えます。そして、周囲の山々から約70の川が流れ込み、流れだす川のないイシククル湖は、キルギスの「透明な水」の象徴です。この湖の全容を世界に知らしめたロシアの探検家、セミョーノフ・テンションスキー（1827～1914）は、「雪山の粹におさまったブルーのエメラルドと、その美しさを活写しました。

東西177キロ、南北の一番広い部分が75キロと細長い形で、面積は6,332平方キロに及ぶ巨大な内陸湖です。透明度も非常に高く、沖の方では水面下20メートルの白い円板が、よく見分けられるということです。私は今回、このイシククル湖で泳ぐことができ、感無量でした。そして、大人も子どもも男性も女性も全ての現地の人たちが、親切で暖かい透き通るような笑顔で私たちに接してくれたことも、キルギスの「透明感」を語るうえで、忘れることはできません。

透明なキルギスの地を覆っているのは、いうまでもなく、澄みきった青い空です。これをなんと呼んだらよいのでしょうか。モンゴルの最大の売り物は「モンゴルブルー」の空ですから、やはり「キルギスブルー」でしょうか。でも、空に国境がない以上、そういう呼び方は馴染まないような気がします。そこで、あえていえば、それはユーラシアンブルー。仰ぎ見る場所は違って、大きな美しく青い空が、ユーラシアいっばいに広がっています。

## &lt;&lt;報告Ⅲ&gt;&gt;恒例の暑気払い

98年前半期の節目、恒例の暑気払いが7月11日、池袋の東京芸術劇場で開催された。

アスカル ショマノフさん（カザフスタン開発研究所政治研究センター主任研究員）と内モンゴルの脚本家で早稲田大学留学生アロハンさんのショートスピーチを挟み、キルギス、サハ、タジキスタンの留学生のほか、文化講座や月1回のユーラシアンフォーラムで知り合った人たちが出席、北海道のタラバガニ、ズワイガニをおつまみに楽しい交流会となりました。アスカルさんの発表は、日本人にまだなじみのないカザフスタンの地理、人口、通貨、鉱物資源、民族の歴史、外交政策などについて発表。全文については会報12月

号で発表の予定です。アロハンさんは、内モンゴルの映画づくりの現状について、自らの体験に基づいて発表しました。この他、サハ在日代表部のバラムイギンさんが、この春にサハ共和国を襲った大洪水の被害を説明、義援金の要請をしました。この結果、3万8千円が集まりました。

東京アイヌ協会の浦川治造さんは、アイヌの伝統的住居チセ復元計画について説明しました。チェチェンの平和のために活動する日本山妙法寺の寺沢さんの近況、チェチェンの児童アンサンブルの招聘について報告、参加者全員が自由に意見を発表しました。

## &lt;&lt;報告Ⅳ&gt;&gt;第2回「ユーラシアコミュニケーションフェス in 小出」感動を届けて開催！

7月25、26日、新潟県・小出郷文化会館で第2回「ユーラシアコミュニケーションフェス」が開催されました。コンサートに参加したのは内モンゴルの歌手オドバルさんとそのグループ、ロシア・サハ自治共和国のハトウラーエフ夫妻、ウイグルの留学生を中心とした歌舞グループ、北海道・浦河町のウタリ文化保存会の歌舞団及び地元権現堂太鼓でした。クラブの会員で、現在兵庫県で生活する山本雅宣さんが、昨年に続きフェスの司会のため合流、見事な進行ぶりを見せました。またモンゴルの芸能研究家鈴木英明さんとサハ在日代表部のバラムイギンさんがそれぞれ演目、民族文化の解説を実施、好評でした。演奏は、いずれも、レベルが高く、心を打つ印象深いものでしたが、特にハトウラーエフ夫妻の「自然の音」は、民族のバックランドにある自然や動物を擬音構成で表現するこれまでにない感動的な舞台を作り、大きな拍手を受けていました。芸能が民族文化の理解に役立つものだということがよく理解できる演奏でした。これは翌日、野外のコンサートとなった奥只見銀山平の湯之谷村国際雪祭り会場のコンサートでも再現され、フェスティバル会場にユーラシアの声が届きました。参加者は、関東一円のほか富山、静岡、山形などから車で集まりましたが、コンサートの前には温泉、コンサートの後は、キャンプ場や山小屋で懇談、また2年前発見された自噴する温泉で鋭気を養いました。今年は新聞発表などは一切なく、口コミだけで昨年並の参加者が確保できました。しかしさらに多くの人に参加してもらうよう働き掛けることも必要で、来年の開催方法も含め今後検討することになりました。

ユーラシアンフェスに“感謝”です

(社)全国公立文化施設協会 芸術情報プラザ 佐伯真由美

子どもの頃から行ってみたかったモンゴルに昨年旅行してから、ずっとあの空と、風と、広い広い草原の匂いを忘れられずにいました。そんな私がわくわくした気持ちでオドバルさんの歌声を聴いたとき、自分の気持ちが開放されて、とても懐かしい、泣きたいような気持ちになりました。そして、歌や踊り、そして馬頭琴の深い響きを聴いているうちに、自分がホールの中で、舞台を見つめていることを忘れていくのです。目と耳だけでなく、全身で感じようと思いました。心の中には、懐かしい、忘れられない景色が次々に広がってきました。大地にふく風や空気の匂いが、歌声と馬頭琴の音色から感じられます。馬に乗って走った草原の

感触が、躍動的な踊りを観ていると伝わってきます。そして、サハのハトウラーエフさんの音楽。音楽というよりパフォーマンスという方が相応しい気がしました。眼を閉じて聴いていると、本当に森の中にいるように思えます。しかも、数分間で色々な季節を感じることができるのは本当に不思議なほどでした。また、言葉はわからないけど圧倒された早口言葉！とても軽快でした。ハトウラーエフ夫人の優しい、可愛いらしい声も大変魅力的でした。

小出郷という地域は大変な豪雪地帯ですが、厳しい自然環境と共に生活しているこの土地の方々は、驚くほど穏やかで暖かいですね。ユーラシアの大地と共存している様々な国の人々と、どこか共通点があるように思いました。今回初めて参加させていただいたユーラシアンフェスでは、同じ楽しみを共有できる様々な人

と出会えたことが、一番嬉しい出来事でした。  
特に、権現堂太鼓とウイグルの歌舞グループ、そしてウタリ文化保存会の皆さんと会場全員が融合し、一緒に演奏し、歌い、踊り、笑ったときには、普段は異なる地域に生活していても、言葉や文化に違いがあっても、人であるということだけで、簡単に繋がりができ、

気持ちを通じ合えるということを実感しました。  
また、スタッフの皆さんの、常に笑顔で参加者と一緒に楽しむ姿勢も印象的でした。  
いろいろな人と出会い、心から楽しく過ごせた2日間に感謝します。  
ありがとうございました。

<<9月3日フォーラムから>> 帰国スピーチ

私はチムールです。キルギスタンからやって来た。日本で1年暮らした。勉強する時間がなかったため、日本語を学ぶことはできなかった。しかしその代わり、お陰で修士課程を通ったし、日本のことも少しは理解できたかな、と思う。

私たちの国では日本のことを多くの人が神秘的な国、非常に多くのことを大胆に易々と成し遂げる国だと思っている。私たちが日本のことを語る時はいつも尊敬を込めて語る。しかし日本のことを知っていたり、日本に行ったことのある人は少ないのだ。

<日本の成功と日本人の不思議さ>

日本の人々は、どこでもそうだがいろいろだ。でも、多少は性格的な特徴がある。それは例えば控えめさや我慢強さ、非常に勤勉できれいな好き、新しいことを非常にすばやく身につける能力や自己実現への努力、集団主義的であるが個人主義的なこと、等等である。私の見るところでは、これらは日本人の際立った特徴と思える。「そういった特徴は、他の民族にもあるものではないか」と言う人もいるかもしれない。だがそれは、日本の歴史と特色を考慮していないと言えよう。

日本を知ること、またこれを語ること、完全にこれを行うということはずっと無理だ。しかし私が見聞きしたことからも、私は「日本人の秘めた力」というものを感じざるを得ない。私は日本人故に日本が好きになった。日本人は偉大で賢く、忍耐強く良く働く。

私は日本が日本人の中にいても、まったくの異邦人であると感じたことは無かったし、人々の中にあって貶められたと感じたことも無い。これは同じモンゴロイドであり、同じ色の目や肌や髪だからかもしれない。また、もしかしたら日本人が他の主権、独立性を尊ぶからかも知れない。またあるいはこれは私だけの意見で他の人は意見を異にするかもしれない。

いずれにせよ、私は自分の子供たちにここへやって来るチャンスがあって、この国を見、この国の人々に会い、豊かなこの国の歴史を学び、日本語を学ぶことを望む。彼らにとって、それがとても良いことであり、また興味深かろうと思うからだ。

チムールベクさん

キルギスタン大蔵省政府派遣留学生

私はここを立ち去るが、悲しいとは思わない。またいつか戻って来るのだから。それに、少し、ほんの少しだけでも日本と日本について身をもって知ることが出来たのだ。今を去る21年前、初めて空手や合気道、アイヌのこと、サムライのこと、日本の自動車のこと、を書物で読んでいた頃を思えばなおさらだ。

70年代も末、そのころの私は夢でなく、それらのものを全て目で見ることになろうとは知る由もなかった。

私は今満足している。日本人の教授に教えていただいた良かった。京都や奈良を見ることができてよかった。富士山は晴れていて、良かった。ユーラシアンクラブがあって良かった。そしてクラブに集う情熱家たちがいて良かった。さようなら日本、再び必ず会いましょう。

(翻訳：伊集院 隆介)

<<事務局からのお願い>>

ユーラシアの理解、親睦、協力促進のため引き続き努力します。同封の葉書での参加の申し込みをお待ちしています。また文化講座等催しへの参加呼びかけ、会報、ニュースレターの購読、クラブの活動を理解し、支持していただく会員の募集にもご協力下さい。

●クラブへのお問い合わせ・お申し込みは

ユーラシアンクラブ

〒215-0013 川崎市麻生区王禅寺 2485-2-204

電話：044(965)2536 F A X：044(965)253

E-mail:PAF02266@nifty.ne.jp

ユーラシアンクラブのホームページ

<http://member.nifty.ne.jp/EURASIANCLUB/>